

『市村清実践哲学』新装版発行に寄せて

リコー三愛グループ 三愛会 会長 近藤 史朗

三愛会は市村清を共通の祖とする企業グループである。三愛会各社の関係をたとえると、市村清を親とした兄弟のようなものである。

その三愛会は2016年4月に創立70周年を迎えた。そして、最年長のリコーも、同年2月に創業80周年を迎えた。このように三愛会の各社が世の中の役に立ち、それぞれの事業で健全な経営を行って今に至っていることは、私たちの誇りに思うところである。

三愛会長子のリコーは過去に3度危機に直面したが、その度にそれをね返し今に至っている。

危機はリコーを強くし、そして成長のバネとなってきたのである。

一般的に、何年にもわたり繁栄し続けた会社が陥る病気がある。大企業病だ。大企業病は担当者ばかりの会社、リーダーがどこにも存在せず、誰も責任をとらない傾向の会社になってしまう。

例えば、効率を重視するあまり、内部プロセスが複雑になり、意味のない指標が一人歩きし、自らの仕事の意義と価値を考えなくなってしまう。現場を忘れ、直接見に行けば一瞬で分かることを報告させ、報告書を作ることで膨大な時間を費やし、さらに会議に長い時間をかけムダの上にムダを重ねる。そして成長が止まり年老いていく、症状をあげればきりがないのである。

会社がそうなった場合、私たちがなさなければならぬことは何だろうか。創業者の精神に立ち返れということである。創業の精神は「人を愛し 国を愛し 勤めを愛す」ということを掲げたが、後年、市村は館林三喜男（リコー2代社長）に「愛という言葉のため寛容の精神と誤解されやすい。そのためややもすればリコー三愛グループには厳しさが欠如していた」と語っている。それは、1965年無配に転落した1回目の危機の後のことであらう。

三愛精神は企業の危機を救うものでもなく企業の永遠の命を保証するものでもない。危機に際して私たちが立ち返らなければならないのは、創業者の生きざまそのものではないだろうか。これは三愛精神を否定するものではない。危機の時にこそ創業者・市村清の生きざまに学ぶべきなのである。

ネスレの会長を長年にわたり務めたヘルムート・マウハー氏の著書(※)の中に、組織行動学者のハロルド・J・レビットの言葉として「リーダー(経営者)とは道を切り開く人であり、マネジャーとは問題を解決する人である」とある。市村清はまさに道を切り拓く人であった。

市村清の伝記『茨と虹と』をお読みになった方はお分かりかと思うが、市村が幼少の頃から苦難の連続、想像を絶する人生を歩みながら、常に道を切り拓き、リコー三愛ゲルプ各社を立ち上げていくさま、その原動力は何だったのかと思いをはせてほしい。

世の中には困っている人がたくさんいる、そういう人の役に立ちたい!という思いが三愛精神の原点であり、故郷佐賀県、北茂安小学校への講堂寄贈や様々な貢献、財産のほとんどを投じた新技術開発財団の設立へとつながっている。幼少期の厳しい体験が創業者をつき動かしてきたのだろう。その生きざまは、まさに道を拓く人であり、そして現代的に言うならば、希代の「イノベーター(改革者)」そのものであった。

私たちは今、そして未来に向けて、もう一度創業者「市村清」の生きざまに本書を通して触れ、学び、自らの拠って立つ所を確認したいものである。

(※)『マネジメント・バイブル』

ネスレ名誉会長 ヘルムート・マウハー 著

岸伸久 訳

(ファーストプレス社刊)